氏　　名	MARTURANO Juan Pablo（ﾏﾙﾄｩﾗﾉ ﾌｧﾝ ﾊﾟﾌﾞﾛ）
学位の種類	博　士（芸　術）
学位記番号	甲第50号
学位授与日	平成25年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	アートとしての山 －山の表現と奉納物としての石彫－
審査委員	主査　教　　授　　諸川春樹 副査　教　　授　　本江邦夫 副査　教　　授　　水上嘉久 副査　日本大学芸術学部　教授　　髙橋幸次

内　容　の　要　旨

この論文では、「はじめに」のところで、彫刻を選択した理由について説明した。そして来日した理由と、どのようにこの論文のテーマを博士課程で研究するつもりになったのかを紹介した。

第１章「山と人間」では、ヨーロッパの山々が持つイメージの性格がネガティブとポジティブとの繰り返しであり、キリスト教文化によって山に付与された性格についての叙述から始めた。そしてミルチャ・エリアーデのヒエロファニーに関する論考を引用して、聖なる山が三つの宇宙平面、すなわち天-神界と地-我々の世界、そして下界-死者の世界をつなげる世界の柱（axismundi）の象徴であることを述べた。と同時に、聖なる山の様々な例を示すとともに、聖なる山に関連する人工の山の例も挙げた。

またサイモン・シャーマを引用して西洋の歴史的な山への巡礼の例を紹介し、登山の進歩とともにヨーロッパの近代登山界に見える宗教的な痕跡についてコメントをした。前述のエリアーデが示したように、非聖化された西洋社会でも昔の聖なる行為の記憶が色々な形で現れている。そこで「山」と「登山」について、筆者自身のヴィションを介しながら、聖と俗の現代的な解釈を試みた。

第２章は山の美術表現について述べた。まず西洋美術で最初に写実的に描かれた山として、コンラート・ヴィッツとアルブレヒト・デューラーの例を挙げ、ドイツの画家エミール・ノルデの作品と比較しながら、写実表現の２つの傾向について考察した。続いてフランスのサント・ヴィクトワール山を描いたプロスペール・グレジーとセザンヌの山の表現を比較、考察した。また、日本に留学していることもあって、「日本の山の美化」の項では雪舟と江戸時代の葛飾北斎についてコメントしている。山は人間

に恐怖と感動の喜びを生じさせるものであり、それがフリードリヒとウィリアム・ターナーという、ロマン主義の画家による両面性（例えば崇高と不幸）とどのように関わっているかを考察した。「美術制作における山の経験」の項では、アートと登山は美術表現にどのぐらい関連しているか、という問題設定をし、ターナーとトマス・コール、そして現代美術のリチャード・ロングとハミッシュ・フルトンの作品を取り上げた。最後に山に関わる立体の作品として、ロバート・スミッソン、イサム・ノグチ、アニッシュ・カプーア、マリール・ノイデッカー、ヘンリー・ムーアを例としてコメントしている。

第３章は彫刻自体を問題として、彫刻の量感と空間、また我々の彫刻の認識について分析した。素材を扱いながら形態を創造し、量感と空間をつくる。それらに美あるいは意味を与えることによって、その素材と空間の＜質＞を変化させる。そこに、感情や概念や心理などが現れる。ここでは美という概念が一般的に美しいという意味ではなくて、ロダンが述べたように＜ものの性格＞と深く結びついていることを再認識した。ここでいう性格とは、自然の光景に含まれる強靭な真実の有様である。目に見える外部が目に見えない内部の真実を現すということである。

「様式と内容」の項では、近代美術の流れの中でヴィルヘルム・ヴォリンガーが叙述した、具象性-- - 抽象性の２つの傾向を解説し、ロザリンド・クラウスの「展開された場における彫刻」を紹介した。しかしクラウスの彫刻に対するモニュメントの論理には、「聖」の要素が考慮されていない点に筆者は疑問を持っている。ハーバート・リードが述べしたように、彫刻はモニュメントと護符の間にある技術であり、彫刻の制作に対しては呪術や聖などの特性も考える必要があるだろう。彫刻は人間と神々の両方に仕える、聖と俗の表現でもあるからだ。

そして「石」とは何だろうか、という問題を取り上げ、石は彫刻の原材料であり、また母なる大地の部分であるという個人的な考えを説明した。最後に、石彫の制作過程を解説しながら、筆者が用いている道具と方法を紹介した。

第４章は自分の作品についての紹介、分析である。アルゼンチンとイタリアで制作した作品から始め、来日した時のカルチャーショックがもたらした「ポップコーン・アート彫刻シリーズ」について述べた。その後、博士課程へ進学し、自分の彫刻に「山」という新しいテーマを見つけて、様々なアプローチで研究、制作したことを述べている。その中には、《空の断片》の作品と「捧げ物と証拠」のプロジェクトなど多岐にわたるものが含まれている。

審 査 結 果 の 要 旨

パブロ・フアン・マルトゥラーノ君はアルゼンチンの国費留学生として来日され、本学で石彫に関する研究を重ねてこられた、きわめて勉強熱心な彫刻家です。アルゼンチンではまず土木工学を学ばれていたようですが、人に感動を与えることのできる視覚イメージ、それも具体的な三次元のイメージを生み出すことに興味を持たれ、当地の美術大学エスクエラ・ナシオナル・デ・ベッラス・アルテスを卒業後イタリアに渡り、カッラーラ美術大学で石彫の制作を研究するようになりました。その制作の間に、いつしか日本の花崗岩に惹かれるようになったということです。その後来日されるとまず金沢美術工芸大学で彫刻を学びながら、日本語もしっかりと身につけられました。パブロ君が日本語で博士論文を提出するきっかけはこの頃に見出すことができるでしょう。

とはいえ、この時期にはまだ山のモチーフは選択肢のひとつに過ぎなかったようです。しかし日本で生活している間に、わが国の美術における山の表現に感心して、しだいに石で山を彫るようになりました。それには彼の登山家としての活動が大きく影響したことは想像に難くありません。その後、ご自身の彫刻に対する心構えを制作面だけでなく理論面でも再確認することを強く望まれて、本学の博士課程に入学されたというのがこれまでの経緯です。

本学の博士課程に入学した当初から、パブロ君は一貫して山のテーマによる制作と理論研究を展開し、指導教員と意見交換をしながら地道に論文と作品を仕上げられました。特筆すべきは彼の日本語の運用能力で、漢字、ひらがな、カタカナを読みこなし、筆記もすべて日本語で行われたことです。アルゼンチンの公用語はスペイン語ですが、パブロ君は英語の能力もきわめて高かったので、当初、論文は英文で提出することになっていたのですが、日本語の語学能力を生かして最終的には日本語で博士論文を提出することにいたしました。これは本学でもきわめて稀なケースですが、外国からの留学生には挑戦すべきひとつの目標になるにちがいありません。

もちろん日本の文化にも関心が深く、それは「山への奉納」という新しい展開を生むことになりました。そうして提出された論文の表題「アートとしての山」には、パブロ君の独自の視点がすでに予告されています。山そのものが芸術の対象になっているのです。そして副題の「山の表現と奉納物としての石彫」からは今述べた新しい展開、すなわち彼が「捧げものプロジェクト」と命名した、現前する山と作品との間に宗教的な関係を模索する活動の、その理論的なバックグラウンドを築くことが今回の論文の目的であったことがうかがわれます。

そこで論の内容を順に追ってみましょう。まず「山と自然」と題された第１章では、山に対するイメージが西洋と東洋ではどのように異なるのか、が考察されています。パブロ君はその相違を明確にする基準を「聖性」に求め、そこから山に対するさまざ

まな畏怖の形を芸術作品や祭りなどの具体的な対象物で述べるとともに、その歴史や文化的背景に触れています。特にエリアーデが提案した「世界の軸」は山の解釈には便利であり、そこからアニミズムの文明を語りながら、山を巡る一種の宇宙論ともいうべき展開がなされています。彼は制作面でも「山への奉納物」という性格を持った作品を発表しており、実際それを山頂で山の神に捧げるというパフォーマンスを行っています。論文が作品を説明し、作品が論文を解説するという幸福な関係にあるのです。

こうした山に対する畏怖は山そのものの美化につながり、それを愛でる喜びにもつながります。それを述べたのが第２章の「山の表現」です。パブロ君は東西の絵画における写実的な山の表現をいくつか例にあげて、それを描いた作家の、山における体験がいかに重要であったのかを分析していますが、それはまさに登山家ならではの現実的な視点からなされたもので、その意味でもきわめてユニークな論だといえます。

続く第３章では素材である石の問題と、彫刻とは何かという造形論が取り上げられています。私たちが何気なく目にしている石は、地球の一部であり、また宇宙の構成物であるとすれば、そこに壮大な宇宙の営みを感じることができるというのです。この点はすでに第 1 章で展開された論と重複するのですが、パブロ君はさらに石を扱う彫刻家にとっての素材である石の意味や重要性をとらえ直し、さらには造形の問題へと発展させました。ここではハーバート・リードやヴォリンガーの引用とともに美術史的な考察がなされ、パブロ君の学習範囲の広さをうかがわせます。と同時に、ロザリンド・クラウスへの反論など、彫刻家の気骨を感じさせる一面も顔をのぞかせています。こうしたレファレンスの幅の広さや、彫刻家としての視点から述べられた造形理論は論理的にもよく整理されていて、審査においても高く評価されました。

最後の第４章では自作を中心に、彫刻との出会いから現在に至るまでのさまざまな試みが記述され、最終的に現在進行中の「捧げ物プロジェクト」の意義についての説明がなされています。来日当初制作された「ポップコーン・シリーズ」は、日本のポップコーンが珍しい形であることに注目して始められたということで文化的な差異、いわゆるカルチャーショクが作家の重要なインスピレーション源になることが垣間見えます。それは外国の作家が日本で制作する意義でもあるのですが、先に述べた日本における山の表現に惹かれていく様子が、今度はパブロ君自身の作品によって語られています。この部分を通読すれば、登山家としての体験と彫刻家としての経験がうまくリンクして現在の活動になっていることがよくわかります。

本論は、一言でいえば「山の持つ崇高な性格を彫刻家はいかに表現するのか」という問題に答えたものです。と同時に、本論はその表現において、彫刻家がいかに実際的な要素（素材）、理論的背景（造形理論）、精神的な面（直接的な経験）を総合的に組み合せているかを考察した試論でもあるのです。パブロ君は自身、登山家でもあり、こうした三位一体的な経験を日々積み重ねながら制作していることが、論文の随所に

感じ取れる論文です。西洋文化に属する作家が山を彫刻で表現することは比較的珍しいのですが、その制作の新しい意味が、論文にも作品にも込められているのです。

またヨーロッパの言語を母国語にする留学生にとってきわめて難解な日本語の記述を見事に操り、言語能力の高さを証明して見せたことも特筆すべきでしょう。こうした成果を手にするために払われた努力に、指導教員の一人として感服しております。

以上を総合し、審査員合意の上で本学における博士の学位をパブロ・フアン・マルトゥラーノ君に授与することが適切であると判断いたしましたので、ここにご報告申しあげる次第です。

（諸川　春樹）